

16. 7. 2004

日本国特許庁
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出願年月日 2003年 7月28日
Date of Application:

REC'D 10 SEP 2004

出願番号 特願2003-281211
Application Number:
[ST. 10/C]: [JP2003-281211]

WIPO PCT

出願人 クラリアント インターナショナル リミテッド
Applicant(s):

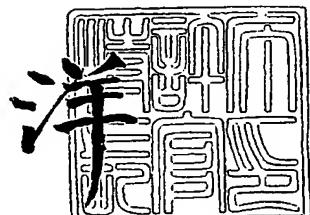
BEST AVAILABLE COPY

PRIORITY DOCUMENT
SUBMITTED OR TRANSMITTED IN
COMPLIANCE WITH
RULE 17.1(a) OR (b)

2004年 8月27日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

八 月



【書類名】 特許願
【整理番号】 K03056
【あて先】 特許庁長官殿
【国際特許分類】 F21V 8/00
【発明者】
【住所又は居所】 東京都文京区本駒込二丁目28番8号 文京グリーンコート センターオフィス9階 クラリアント ジャパン 株式会社内
【氏名】 原田 隆正
【発明者】
【住所又は居所】 ドイツ連邦共和国 ヴィスバーデン ラインガウシュトラーセ 190 クラリアント・ゲゼルシャフト・ミト・ベシェレンクテル・ハフツング内
【氏名】 北 文雄
【特許出願人】
【識別番号】 397040605
【氏名又は名称】 クラリアント ジャパン 株式会社
【代理人】
【識別番号】 100108350
【弁理士】
【氏名又は名称】 鐘尾 宏紀
【選任した代理人】
【識別番号】 100091948
【弁理士】
【氏名又は名称】 野口 武男
【手数料の表示】
【予納台帳番号】 045447
【納付金額】 21,000円
【提出物件の目録】
【物件名】 特許請求の範囲 1
【物件名】 明細書 1
【物件名】 図面 1
【物件名】 要約書 1
【包括委任状番号】 9715406

【書類名】特許請求の範囲**【請求項 1】**

点光源からなる発光部および導光板を有し、導光板の背面側に反射面が設けられ、またプリズムパターンを有する面光源装置において、導光板の出射面側に、光を散乱透過させる屈折率の異なる少なくとも二相からなり、屈折率の大きい一相がフィルムの厚さ方向に延在する柱状構造を有する多数の領域を含むと共に、該柱状構造がフィルムの法線方向に対して5°以上60°以下の角度で傾斜した指向性光拡散フィルムを、該指向性光拡散フィルムの散乱方向が輝度ムラの方向と同方向となるように配置したことを特徴とする面光源装置。

【請求項 2】

請求項1記載の面光源装置において、前記指向性光拡散フィルムが、粒径が0.1～50μmの微粒子を含有する光拡散粘着剤を介して前記導光板またはプリズムパターンを有するプリズムシートと貼り合わされていることを特徴とする面光源装置。

【請求項 3】

請求項2記載の面光源装置において、前記光拡散粘着剤は、粒径が1～100nmで屈折率が1.8以上の微細粒子を含有することを特徴とする面光源装置。

【請求項 4】

請求項2または3に記載の面光源装置において、前記光拡散粘着剤の屈折率が1.55以上であることを特徴とする面光源装置。

【請求項 5】

請求項1～4のいずれかに記載の面光源装置において、前記柱状構造が、該柱状構造の軸線に向かって屈折率が徐々に変化する構造を有することを特徴とする面光源装置。

【請求項 6】

請求項1～5のいずれかに記載の面光源装置において、前記発光部が導光板端面の中央に対向配置され、前記指向性光散乱フィルムの散乱方向が他の端辺に並行であることを特徴とする面光源装置。

【請求項 7】

請求項1～6のいずれかに記載の面光源装置において、前記発光部が導光板端面の角に対向配置され、前記指向性光散乱フィルムの散乱方向が発光部と対向する対角に向かうことを特徴とする面光源装置。

【書類名】明細書

【発明の名称】面光源装置

【技術分野】

【0001】

本発明は、面光源装置、特に、液晶表示装置等の画像表示装置においてバックライトとして用いられる面光源装置に関する。

【背景技術】

【0002】

従来、液晶表示装置をはじめとする画像表示装置においては、表示パネルを照明するために面光源装置が用いられている。この面光源装置は、通常、発光部、導光板、反射板、プリズムシートなどから構成されている。ここで従来の面発光装置を、図を参照して説明する。図1および図2は、従来の面発光装置の一例を示す模式断面図であり、発光部1、導光板2、反射板3、光拡散フィルム4およびプリズムシート5からなっている。図1の面発光装置において、発光部は、点光源である発光ダイオード(LED)あるいは線光源である冷陰極蛍光灯等からなっている(例えば、特許文献1参照)。近年、携帯電話等の中小型の液晶表示素子では、装置の小型化並びに低消費電力の要求から、光源として発光ダイオード等の点光源が用いられ、また点光源により照明が不均一とならないよう、複数個の発光ダイオードが実装されたものも知られている(例えば、特許文献2参照)。そして、発光部1は導光板2の端面(入射端面)に沿って対向配置されている。一方、導光板2は、ポリカーボネート樹脂やメタクリル樹脂等の透明で屈折率の大きな樹脂によって形成されている。導光板の背面(下面)2bは、必要に応じ凹凸加工や拡散反射インク等のドット印刷等による拡散パターンが形成されている。反射板3は、反射率の高い例えはアルミニウムあるいは銀等からなる反射面を有し、図示されていない両面テープにより反射板の両端部が導光板の背面に貼り付けられている。このとき、導光板の背面2bに、アルミニウム、銀等を直接蒸着するなどして反射面を形成し、反射板が省略されることもある。また、プリズムシート5は、断面三角形状のプリズムパターンが互いに平行に配置されたものであって、導光板2の光出射面2a上に配置され、図1の面光源装置においては、プリズムパターンが導光板と反対側に、また図2の面光源装置においては導光板側にプリズムパターンが配置されている。

【特許文献1】特開2001-143512号公報

【特許文献2】特開2001-281456号公報

【0003】

これら従来の面光源装置においては、発光部1から出射された光は、導光板の上面2aまたは背面2bで反射した後、あるいは反射することなく導光板の下部に配置された反射板もしくは拡散パターンにより上方に拡散される。プリズムシートに達した光は、プリズムの集光効果により、上面の極狭い角度に光が集光され、正面方向で輝度が高くなり、かつ全面均一の照明がなされるよう、プリズム角、拡散パターンの凹凸角、拡散反射インク等のドット印刷などの光学的設計がなされている。

【0004】

ところで、従来発光部の点光源としては、チップ型LEDなどの発光ダイオードが用いられているが、このような発光ダイオードは指向性を有し、図3に示すように、点光源である発光ダイオード11から真下に向かう0°の光軸が最も強い光を出して遠くまで届く。そして、0°から両側へ30°、60°と離れる程、光が弱くなり届く範囲も短くなり、ほぼ均等な光が届く範囲は、縦長の楕円形11aをなしている。このため、チップ型LEDなどの指向性を有する発光ダイオードを光源として用いる場合は、面光源装置から出射される光量の均一化を図るべく、図4(a)に示すようにマイクロプリズム12mを有する導光板を用い、図4(b)に示すようにこのマイクロプリズムのパターンPを、点光源11を中心として同心円状のパターンとすることが提案されている。これにより、点光源から照射された光の光軸とマイクロプリズムパターンPとはどの場所においても90°となり、導光板の中央部も端部も同じ密度でマイクロプリズムに反射され、出射する光の

明るさが向上し、従来のものに比べ輝度のバランスが軽減される。また、導光板の背面（下面）に凹凸加工や拡散反射インク等のドット印刷等による拡散パターンやマイクロプリズムを設けることに代えて、反射板と導光板の間にこれら拡散パターンあるいはマイクロプリズムを有する光学フィルムを設けることによっても同様の効果ができる。また、反射板の反射面を拡散パターンあるいはマイクロプリズムと同様な凹凸面とすることにより、同様の効果を得ることも提案されている（例えば、特許文献3参照）。しかし、この場合であっても、点光源である発光ダイオード11から出射される光は図3に示されるように指向性があるため、面光源装置においては中央部が明るく、角四隅部、特に左上および左下の隅部では暗くなってしまうという問題は残る。このような問題を解決すべく、図5に示されるように、点光源11を導光板のコーナー部12cに設け、またマイクロプリズムの同心円状のパターンPの中心を導光板のコーナー部またはその近傍に設けるようにすることも提案されている（例えば、上記特許文献1参照）。

【特許文献3】特開2003-100129号公報

【発明の開示】

【発明が解決しようとする課題】

【0005】

ところで、点光源を使用する面光源装置を液晶パネルのバックライトとして用いる場合、液晶表示パネルの画像が見易い視野角は通常30°（±15°）程度とされる。しかし、図1に示したような面光源装置や図2に示したような面光源装置においては、点光源が図3の実線カーブ11aで示されるような指向性を有することから、プリズムパターンから出射される光の指向特性は、放射状の光ムラが発生しやすく、特に斜め方向から輝度ムラが視認しやすい。これは、特に、数個の点光源を用いた場合に比べ1灯の点光源の場合が顕著であるため、このムラの視認の問題は点光源の数を増やすればある程度解決できるものの、点光源の数を増やすことは高コスト、高電力消費となるという問題がある。したがって、点光源1灯において、このような斜め方向からの視認ムラが発生しない面光源装置が待ち望まれている。このことは、図4あるいは図5で示されるごとき同心円状のプリズムパターンが導光板あるいは反射板に設けられた面光源装置などにおいても同様である。

【0006】

したがって、本発明の目的は、1灯の点光源が光源として用いられる面光源装置において、輝度ムラ、特に斜め方向から表示画像の観察を行った場合における輝度ムラの視認が少なく、かつ画面正面方向においてより明るく、高効率の光照射が可能な面光源装置を提供することである。

【課題を解決するための手段】

【0007】

本発明者は鋭意検討した結果、上記問題は、前記導光板の光出射面側に指向性を有する光拡散フィルムを配置することにより解決できることを見出した。ここで指向性とは、散乱の大きさが方向によって異なることを意味し、輝度ムラの発生する方向に対して光拡散フィルムの散乱方向を適切に対応させることにより輝度ムラの発生を防ぐことができる。

【0008】

すなわち、本発明は以下に記載する面光源装置である。

(1) 点光源からなる発光部および導光板を有し、導光板の背面側に反射面が設けられ、またプリズムパターンを有する面光源装置において、導光板の出射面側に、光を散乱透過させる屈折率の異なる少なくとも二相からなり、屈折率の大きい一相がフィルムの厚さ方向に延在する柱状構造を有する多数の領域を含むと共に、該柱状構造がフィルムの法線方向に対して5°以上60°以下の角度で傾斜した指向性光拡散フィルムを、該指向性光拡散フィルムの散乱方向が輝度ムラの方向と同方向となるように配置したことを特徴とする面光源装置。

【0009】

(2) 上記(1)記載の面光源装置において、前記指向性光拡散フィルムが、粒径が0.1～50μmの微粒子を含有する光拡散粘着剤を介して前記導光板またはプリズムパター

ンを有するプリズムシートと貼り合わされていることを特徴とする面光源装置。

【0010】

(3) 上記(2)記載の面光源装置において、前記光拡散粘着剤が、粒径が1～100nmで屈折率が1.8以上の微細粒子を含有することを特徴とする面光源装置。

【0011】

(4) 上記(2)または(3)に記載の面光源装置において、前記光拡散粘着剤の屈折率が1.55以上であることを特徴とする面光源装置。

【0012】

(5) 上記(1)～(4)のいずれかに記載の面光源装置において、前記柱状構造が、該柱状構造の軸線に向かって屈折率が徐々に変化する構造を有することを特徴とする面光源装置。

【0013】

(6) 上記(1)～(5)のいずれかに記載の面光源装置において、前記発光部が導光板端面の中央に対向配置され、前記指向性光散乱フィルムの散乱方向が他の端辺に並行であることを特徴とする面光源装置。

【0014】

(7) 上記(1)～(6)のいずれかに記載の面光源装置において、前記発光部が導光板端面の角に対向配置され、前記指向性光散乱フィルムの散乱方向が発光部と対向する対角に向かうことを特徴とする面光源装置。

【0015】

以下、本発明を更に図を参照しつつ詳細に説明する。図6は本発明の面光源装置(バックライト)の一実施態様を示す模式断面図であり、図6の面光源装置は、点光源からなる発光部11、導光板12、導光板の背面側に設けられた反射面を有する反射板13、指向性光拡散フィルム14およびプリズムパターンを有するプリズムシート15を有し、かつ該指向性光拡散フィルムの散乱方向が輝度ムラの方向と同方向となるように配置されている。また、本発明の面光源装置の他の実施態様を示す模式断面図を図7に示す。図7においては、図6の面光源装置の指向性光拡散フィルム14が光拡散粘着剤層16により導光板12に貼り合わされている。本発明の面光源装置の更に他の実施態様の一部模式断面図を図8、図9に示す。図8、図9においては、プリズムパターンPが導光板12の下面12bに設けられている。プリズムパターンPが導光板の下面12bに設けられている場合には、プリズムシート15は省略されてもよい。また、図9に示すように金属の蒸着などにより反射層18が導光板背面(下面)上に設けられ、反射面とされていてもよい。なお、図7～9においては、図6と同じものについては説明を省略した。以下、本発明の面光源装置について、さらに具体的に発光部、導光板、反射板、指向性光拡散フィルム、プリズムシートなどについて説明する。

【0016】

まず、発光部は、液晶表示装置などの画像表示装置において、従来バックライト光源として用いられている点光源11であれば何れのものであってもよい。例えば、GaP系、GaAlAs系、InGaAlP系など種々の材料からなる発光ダイオード(LED)を使用しうる。本発明において、発光部は、1灯のLEDなどの点光源からなる。点光源11は、通常、図4あるいは図5に示されるように、導光板12の入射光端面に対向され、導光板入射光端面12eの中央部あるいは角部12cに配置される。

【0017】

導光板12は、透明で屈折率の大きい材料からなる板状部材である。導光板を構成する材料としては、従来導光板の材料として用いられているものであれば何れであってもよいが、特に好ましいのは、透明性および屈折率の観点から、ポリカーボネート樹脂およびメタクリル樹脂である。また導光板の形状も従来のものと同様のものでよく、導光板の背面(下面)12bには必要に応じ凹凸形状あるいは印刷による拡散パターン12dが設けられてもよい。また、図8に示すように、導光板12の下面にプリズムパターンPが設けられ、これにより導光板内を伝播してきた光を反射せしめて、面光源装置の出射面側に出射

するようにしてもよい。さらに、プリズムパターンは導光板上面に形成されてもよい。

【0018】

反射板は、光反射性を有するものであればどのようなものであってもよい。好ましい反射板としてはアルミニウム箔などの金属シートあるいは金属板、合成樹脂などのシートあるいは板にアルミニウム、銀などの光反射面を形成することのできる金属を蒸着したシートまたは板など、従来面光源装置において反射板として用いられていたものが任意に用いられる。必要であれば、白色拡散板が用いられてもよい。さらに、図9に示されるように、導光板の背面に金属蒸着層からなる反射層18、白色拡散膜などの反射膜が形成される場合には、反射板を配置する必要は無い。

【0019】

本発明の面光源装置において用いられ、本発明の大きな特徴をなす指向性光拡散フィルム14の一部模式断面図を図10に示す。指向性光拡散フィルム14は、光を散乱透過させる屈折率の異なる二相21、22からなり、屈折率の大きい一相がシートの厚さ方向に傾斜して延在する多数の柱状構造22を有する領域を含む光拡散フィルムである。指向性光拡散フィルム14は、該導光板12の上部に配置される。本発明の面光源装置においてプリズムシート15が用いられる場合、指向性光拡散フィルム14はプリズムシート15と導光板12の間に配置されてもよく、またプリズムシート15の上部に配置されても良い。

【0020】

この指向性光拡散フィルムにおける光拡散現象を、図10および図11により説明する。図10は、指向性光拡散フィルムの光散乱光軸に沿っての断面図である。図11は、図10に示された指向性光拡散フィルムの光散乱光軸に沿って角度を変えて光を入射させたときの直線光透過率を示す図である。図10において、高屈折率領域である柱状構造22は円筒状に形成されている。この指向性光拡散フィルム14は、低屈折率相である高分子フィルム21中に光の波長に近い直径を有する円柱状の高屈折率領域22がフィルム面に対して傾斜して形成されている。このような円筒状高屈折率領域22は、例えば円筒状高屈折領域22と低屈折領域21との界面において、徐々に屈折率が変化するよう形成することにより円柱レンズとして機能する。図10の指向性光拡散フィルム14において、フィルム14に対する入射角が図の左側方向に大きくなつて、光が円柱の軸線に対してより大きく傾斜した角度で入射するようになる（図11において、正角度方向に大きくなる）にしたがつて、光は散乱性を失い、高い透過性を示すようになる。一方、光の入射角が円柱の軸線方向に近づくにしたがつて（図11において、負角度方向に大きくなる）、散乱が大きくなり、透過率が下がる。光の入射角がさらに円柱の軸線に近づいていくと透過性が回復し、入射角が円柱軸線を超えると再度散乱により透過率が落ちた後透過率が回復する。図11において、指向性光散乱フィルムの散乱は、1方向の散乱が $-40^\circ \sim -20^\circ$ で最大となるが、この指向性光散乱フィルムの散乱最大角度は、指向性光散乱フィルムの屈折率、柱状構造の径、フィルム膜厚、柱状構造の傾斜角などにより任意に制御することが可能である。本発明の面光源装置においては、柱状構造の軸線の傾斜は、通常、フィルムの厚さ方向に対して $5^\circ \sim 60^\circ$ 、好ましくは $10^\circ \sim 50^\circ$ 、より好ましくは $20^\circ \sim 40^\circ$ とされる。

【0021】

上記のように、図10、図11で示される指向性光散乱フィルムは、フィルム表面に対して散乱光軸 $0^\circ \sim 60^\circ$ の角度で入射した光はほとんど散乱されず透過する一方、 $-40^\circ \sim -20^\circ$ の角度で入射した光は散乱される。この特性は、極めて特殊な光学特性であり、この特性を用いて点光源を用いた面光源装置の輝度ムラを解消することができる。すなわち、画像表示装置を斜め方向から観察した際に点光源による光ムラと視認される斜め方向に出射される光を、指向性光拡散フィルムの散乱角度と、光ムラが表れ易い斜め観察角度とをほぼ一致させることによって散乱させ、斜め方向から観察した際に視認された光ムラを解消することができるものである。

【0022】

なお、光散乱のパラメーターとしてAOV (Angle of View) を定義することができる。AOVが小さいほど散乱特性は小さく、光は透過することを示す。実験的にはレーザー光をフィルムに照射し、受光部を180度回転して光強度を測定する。AOVは、この光強度プロファイルの半値幅の角度で定義される。図10、図11に示した指向性光拡散フィルムの垂直方向のAOVは5°以下であり、直線光透過率は10%以上を示し、極めて小さな散乱であった。また、0°方向のAOVおよび直線光透過率は、指向性光拡散フィルムの高屈折領域と低屈折高分子フィルムとの屈折率差、柱状構造の径及び密度により容易に変更できる。さらに、最大散乱角度は、指向性光散乱フィルムの高屈折領域と低屈折高分子フィルムとの屈折率差、柱状構造の径、フィルム膜厚、柱状構造の軸の傾き角などで任意に制御することが可能である。

【0023】

光拡散フィルムにおける柱状構造の寸法としては限定するわけではないが、径が10nm～100μmの範囲内が好ましい。また、フィルムの膜厚は、限定されないが、約2μm～約100μmの範囲内が一般的である。さらに、柱状構造の形状は、円柱状に限られるものではなく、楕円柱状、その他の形状であってもよく、その形状寸法が一定でなくてもよい。また、各柱状構造は規則的に配置されていても、不規則に配置されていてもよい。

【0024】

光拡散フィルムにおける柱状構造の形成方法は特に限定されず、従来公知の全ての方法から選択採用できるが、感放射線性を有する高分子フィルムに選択的に放射線照射して、高屈折率の柱状構造を形成する方法が好ましい方法である。高分子フィルムは放射線照射前にはプレポリマーまたはモノマーでもよく、放射線照射後に必要に応じて加熱などの方法で重合させてもよい。このとき、感放射線性高分子フィルムに所望のパターンを形成したマスクを介して放射線を所定の角度をもって照射する方法が好ましい方法であり、この方法による場合、柱状構造とベースフィルムとの境界面において、徐々に屈折率が変化した柱状構造が形成できる。マスクの形成方法は従来知られている任意の方法でよい。他の柱状構造の形成方法としては、感放射線性高分子フィルムにビーム状の放射線を所定角度から照射し、必要部のみを露光し、マスクを用いることなく直接に感放射線性高分子フィルムの重合を行なってもよい。また、高分子フィルムをレーザービームその他の方で穿孔した後、孔内に高屈折率材料を充填する方法でもよい。感放射線性高分子フィルムの材料は、特に限定されないが、例えば、DuPont社よりOMNIDEX（登録商標）、HRF 150およびHRF 600として市販されているものを使用できる。

【0025】

低屈折率領域21を構成する高分子フィルム母材および高屈折率領域22の屈折率は、本発明では特に限定されず、要求される光散乱特性に応じ適宜のものとすればよいが、好ましくは1.2～1.8の範囲内、より好ましくは1.35～1.8の範囲内である。複屈折率があると着色するので好ましくないが、複屈折率が許容される範囲であれば複屈折を示す材料でもよい。高分子フィルム母材および高屈折率領域それ自体は光透過性の高い材料が好ましい。高分子フィルム母材と高屈折率領域の屈折率の差は、一般には0.005～0.2の範囲内の屈折率差に設定される。屈折率差が0.005未満では充分な散乱特性を得ることが容易ではない。好ましくは、0.005～0.1がよい。高分子フィルム母材と高屈折率領域の屈折率は、これら二相の界面で急激に変化する、所謂ステップインデックスタイプでもよいが、徐々に屈折率が変化し屈折率の異なる柱状構造を構成する、所謂グレーデッドインデックスタイプのほうが、望ましい散乱特性が得られるので好ましい。

【0026】

前記光拡散フィルムの特性をまとめると以下の3項目になると考えられる。

- (1) 指向性光拡散フィルムは、屈折率の異なる少なくとも二相以上からなり、光を散乱・透過させる、好ましくは、屈折率が徐々に変化し、レンズ様の柱状構造を有する。
- (2) 前記指向性散乱フィルムの屈折率の大きい一相が、フィルムの厚さ方向に対して5°～60°傾斜する柱状構造であり、該フィルムの法線方向の透過率が10%以上である

(1) に記載の光学フィルムである。

(3) 前記フィルムの厚さ方向に 5° ~ 60° 傾斜する柱状構造の軸線が互いに平行である。

特に、2項目目は導光板、プリズムシート等により集光した光の集光性を妨げずに垂直方向に出射させるには、重要な特性である。

【0027】

次に、本発明において用いられる、 $0.1 \sim 50 \mu\text{m}$ の粒径を有する微粒子を含有する光拡散粘着剤について説明する。本発明においては、光拡散粘着剤は光拡散フィルムと導光板を貼り付け、光拡散フィルムと導光板の間に等方的に光を散乱する光拡散粘着剤層16を形成するために用いられる。このような光拡散粘着剤は、従来公知の各種の方法で製造できるが、一般的には粘着剤ベース樹脂中にフィラーを含有させることにより製造することができる。

【0028】

光拡散粘着剤のベース樹脂の例としては、ポリエステル系樹脂、エポキシ系樹脂、ポリウレタン系樹脂、シリコン系樹脂、アクリル系樹脂等の樹脂を挙げることができる。これらは単独もしくは2種以上混合して使用しても良い。特にアクリル系樹脂は、耐水性、耐熱性、耐光性等の信頼性に優れ、接着力、透明性が良く、更に、屈折率を液晶ディスプレイに適合するように調整し易いことからも好ましい。アクリル系粘着剤としては、アクリル酸およびそのエステル、メタクリル酸およびそのエステル、アクリルアミド、アクリロニトリル等のアクリルモノマーの単独重合体もしくはこれらの共重合体、更に、前記アクリルモノマーの少なくとも1種と、酢酸ビニル、無水マレイン酸、ステレン等の芳香族ビニルモノマーとの共重合体を挙げができる。特に粘着性を発現するエチレンアクリレート、ブチルアクリレート、2-エチルヘキシルアクリレート等の主モノマー、凝集力成分となる酢酸ビニル、アクリロニトリル、アクリルアミド、ステレン、メタクリレート、メチルアクリレートなどのモノマー、さらに接着力向上や架橋化起点を付与するメタクリル酸、アクリル酸、イタコン酸、ヒドロキシエチルメタクリレート、ヒドロキシプロピルメタクリレート、ジメチルアミノエチルメタクリレート、アクリルアミド、メチロールアクリルアミド、グリシジルメタクリレート、無水マレイン酸等の官能基含有モノマーからなる重合体で、 T_g (ガラス転移点) が $-60^{\circ}\text{C} \sim -15^{\circ}\text{C}$ の範囲にあり、重量平均分子量が $200,000 \sim 1,000,000$ の範囲にあるものが好ましい。

【0029】

一方、光拡散粘着剤の硬化剤としては、例えば金属キレート系、イソシアネート系、エポキシ系の架橋剤が必要に応じて1種あるいは2種以上混合されて用いられる。このようなアクリル系粘着剤は、後述するフィラーを含有した状態で、接着力が $100 \sim 2,000 \text{ g}/25 \text{ mm}$ の範囲になるように配合されると好ましい。接着力が $100 \text{ g}/25 \text{ mm}$ 未満では耐環境性が悪く、特に、高温高湿時に剥離の生じる可能性があり、逆に、 $200 \text{ g}/25 \text{ mm}$ を超えると貼り直しができなかったり、できても粘着剤が残るという問題が生じる。アクリル系粘着剤の屈折率は、 $1.45 \sim 1.70$ の範囲、特に、 $1.5 \sim 1.65$ の範囲が好ましい。

【0030】

光拡散粘着剤を構成する光を散乱するためのフィラーの一般的な例としては、シリカ、炭酸カルシウム、水酸化アルミニウム、水酸化マグネシウム、クレー、タルク、二酸化チタン等の無機系白色顔料、アクリル樹脂、ポリスチレン樹脂、エポキシ樹脂、シリコン樹脂等有機系の透明または白色顔料等をあげることができる。アクリル系粘着剤を選択したときは、シリコンビーズ、エポキシ樹脂ビーズがアクリル系粘着剤に対する分散性が優れ、均一で良好な光散乱性が得られることから好ましい。また、フィラーの形状は、光散乱が均一な球状のフィラーが好ましい。

【0031】

このようなフィラーの粒子径は、 $0.1 \sim 50 \mu\text{m}$ 、好ましくは $0.1 \sim 20 \mu\text{m}$ 、より好ましくは $0.5 \sim 10 \mu\text{m}$ の範囲が望ましい。特に、 $1.0 \sim 10.0 \mu\text{m}$ の範囲が

好ましい。粒子径が $0.1\text{ }\mu\text{m}$ を下回ると、フィラーを含有した効果が発揮し難くなり、光散乱性が低下して画像の背景にアルミニウム色が生じ易くなる。一方、ペーパーホワイト性を得るためにには光を細かく分散する必要があるが、粒子径が $50\text{ }\mu\text{m}$ を上回ると、粒子が粗すぎて画面の背景が梨地状となり、ペーパーホワイト性が低下し、画像コントラストが悪くなる。

【0032】

本発明におけるフィラーの屈折率は、粘着剤の屈折率に対して $0.05\sim0.5$ の差があることが必要であり、好ましくは $0.05\sim0.3$ が望ましい。屈折率の差が 0.05 より小さいと、光散乱性が得られず、良好なペーパーホワイト性が得られない。また、屈折率の差が 0.5 よりも大きくなると、内部散乱が大きすぎて全光線透過率が悪くなつてペーパーホワイト性が得られなくなる。また、フィラーの屈折率は、粘着剤の屈折率より低いほうが、調整が容易で生産性が良いことから好ましい。

【0033】

粘着剤ベース樹脂に対するフィラーの含有量は、 $1\sim40$ 重量%、特に $2\sim20$ 重量%であることが好ましい。フィラーの含有量が 1% を下回るとフィラーを含有することによる光散乱の効果が発揮されにくく、光散乱性が低下して本発明の効果である正面輝度の向上および広視野角の視認性が得にくくなる。一方、フィラーの含有量が 40 重量%を上回ると、光散乱層の粘着力が低下して剥離が生じ易くなり、耐久性が損なわれる恐れがあり、光散乱層としての機能を発揮し難くなる。

【0034】

光散乱フィルムに含有させるフィラーとしては、プラスチックビーズが好適であり、特に透明度が高く、マトリックス樹脂との屈折率の差が前述のような数値になるものが好ましい。このようなプラスチックビーズとしては、メラミンビーズ（屈折率； 1.57 ）、アクリルビーズ（屈折率； 1.49 ）、アクリルースチレンビーズ（屈折率； 1.54 ）、ポリカーボネットビーズ、ポリエチレンビーズ、塩ビビーズ等が用いられる。また、酸化セリウム（ CeO_2 屈折率； 1.63 ）等の無機系フィラーであっても良い。酸化セリウムの場合は、 5 nm 程度までの微粒子のものが入手できるが、フィラーの粒径としては、前述のように、 $0.1\text{ }\mu\text{m}\sim50\text{ }\mu\text{m}$ のものが適宜選択使用される。

【0035】

フィラーの屈折率との比較において、用いる樹脂の屈折率が低い場合には、光散乱粘着剤に、屈折率の高い微細粒子、例えば $1\sim100\text{ nm}$ 程度、好ましくは数 $\text{nm}\sim$ 数十 nm の粒径を有する TiO_2 （屈折率； $2.3\sim2.7$ ）、 Y_2O_3 （屈折率； 1.87 ）、 La_2O_3 （屈折率； 1.95 ）、 ZrO_2 （屈折率； 2.05 ）等の無機質微細粒子をフィルムの散乱性を保持できる程度に加えて、屈折率を上げて調整することができる。微細粒子の屈折率は高ければ高いほどよいが、通常 1.8 以上、好ましくは 1.9 以上、より好ましくは 2.0 以上であるのがよい。また、微細粒子の粒径が 100 nm を超えると透明性が阻害されることとなり好ましくない。また、下限値は特に限定されるわけではないが、入手及び分散の容易性から 1 nm 程度、好ましくは例えば 5 nm 以上である。屈折率の低い光拡散粘着剤に前記屈折率の高い無機質微細粒子を添加し、粘着剤のベース材料の屈折率を上げることにより、導光板屈折率の $1.45\sim1.7$ よりも大きな屈折率を有する光拡散粘着剤を形成することができ、この屈折率の高い光拡散粘着剤を用いて指向性光拡散フィルムと導光板とを貼り合わせることにより、導光板と光拡散粘着剤との界面での臨界角が無くなり、全反射が発生しなくなる。したがって、通常全反射により側面へ逃げていく光を効率的に導光板から取り出すことが可能になり、光を有効に使用することが可能となる。

【0036】

なお、図12に、指向性光拡散フィルムの散乱を生じる光軸に沿った直線光透過率と指向性光拡散フィルムと光拡散粘着剤を合わせた光拡散フィルムの直線光透過率を示す。この図12の例では、垂直方向の透過率は高く、散乱は垂直方向から数十度離れた角度に散乱ピークがあり、垂直方向の光は散乱が少なく、導光板で設計された理想的な光を液晶表

示パネル側に出射することができ、斜めに散乱をもつ。特に、本発明で解決する問題点は面光源装置の斜め方向の輝度ムラであり、該光拡散フィルムの斜め方向の拡散により有効に輝度ムラを解消することが可能となる。上記特性に加え、光拡散粘着剤により指向性光拡散フィルムと導光板あるいはプリズムシートを貼り合せることにより、導光板と光拡散フィルム、あるいは光拡散フィルムとプリズムシート間に空間が生じて光の透過効率が低下することを防ぐことが容易となり、液晶表示装置における画像コントラストおよび視認性を向上させる点からも光拡散粘着剤により指向性光拡散フィルムと導光板あるいはプリズムシートを貼り合せることが好ましい。

【0037】

また、本発明の面光源装置が、液晶表示パネルの背後にバックライトとして配置される場合、面光源装置は液晶表示パネルの下部偏光板の下部に配置されることとなるため、液晶表示パネルから遠い位置に指向性光拡散フィルム、プリズムシートなどの光学フィルムが位置することになる。このため、指向性光拡散フィルム、プリズムシートなど光学フィルムに欠陥があった場合もその欠陥が見えにくくなると共に、指向性光拡散フィルムとして、光学的に規則的な反復構造を有していないものが容易に得られるため、このようなものを用いれば液晶表示パネルと光学シートとの間でモアレ縞が発生しにくくなる。

【発明の効果】

【0038】

本発明の面光源装置によれば、導光板の表面に斜め方向へ出射された光の輝度ムラを選択的に散乱する、指向性光拡散フィルムあるいは指向性光拡散フィルムと光拡散粘着剤層からなる光学フィルムを、導光板の表面に対向させて配設しているので、導光板の表面から斜めに漏れた光の輝度ムラが解消され、均一な輝度および正面方向により高い輝度を有する面光源装置、さらにはこれを組み込んだ画像表示装置を提供することができる。

【0039】

また、本発明の面光源装置にあっては、画像表示パネルの背後に面光源装置を配置する場合、画像表示パネルから遠い位置に指向性光拡散フィルム、プリズムシートなどの光学シートが位置するので、これら光学シートに欠陥があった場合もその欠陥が見えにくくなると共に、指向性光拡散フィルムの柱状構造の配置をランダム配置とする、あるいは各柱状構造の径を変えることなどにより画像表示パネルと光学シートとの間でモアレ縞が発生しにくくなる。

【発明を実施するための最良の形態】

【0040】

以下、本発明を実施例により具体的に説明するが、本発明は下記の実施例に限定されるものではない。

【実施例1】

【0041】

本発明の第1の実施例の面光源装置を図6および図13により説明する。図13は実施例1の面光源装置の模式平面図であり、中央円内にはプリズムシートがないときを想定した場合における指向性光拡散フィルムの一部拡大平面図が示されている。なお、図6は、図13のA-A断面図に相当する。実施例1の面光源装置は、図6に示されるように、発光部を構成する点光源11、導光板12、反射板13、指向性光拡散フィルム14、プリズムシート15から構成されている。点光源11は、1灯のチップ型LEDからなり、このチップ型LEDは、図13に示されるように導光板12の端面(光入射端面)12eの中央部に対向するように配置されている。導光板12は、ポリカーボネート樹脂またはポリメタクリル樹脂により形成され、導光板の下面には発光部を中心とした同心円状の多数の拡散パターンが形成されている。拡散パターンは、断面三角形状または断面略半円状(カマボコ形)をした凹部12dによって形成されており、各拡散パターンは、発光部と当該拡散パターンの配置されている位置とを結ぶ方向と直交する方向に延びている。なお、導光板の背面側に配置された反射板上部に同心円のプリズムパターンを形成したプリズムシートを配置しても同等の特性を示す。導光板の下面側にはアルミニウムシートからなる

反射板13が設けられている。また、指向性光拡散フィルムは、図13に示されるように、指向性光拡散フィルムの柱状構造22は傾斜がA-A線に沿った方向（他の端辺に並行）となるよう、即ち指向性光拡散フィルムの散乱方向が輝度ムラの方向と同方向となるように配置される。

【0042】

ここで、実施例1において用いられた指向性光拡散フィルムは、次のようにして作製されたものである。すなわち、感光性ポリマーとしてポリエチレンテレフタレートフィルム上に塗布された厚さ $50\text{ }\mu\text{m}$ のDuPont製OMNIDEX、HRF600または150を用い、この感光性ポリマー層の表面に円形孔パターンを有するマスクをハードコントクト法で密着させた。ただし、マスクの円形孔パターンは、寸法が $500\text{ nm}\sim30\text{ }\mu\text{m}$ の範囲内のもので、その平均径は $2\text{ }\mu\text{m}$ であった。水銀ランプから得られた紫外線をレンズ系で平行光に集光して、マスクの上方から法線方向に対し斜め 30° 方向から照射した。照射時間は数秒から数分とした。その後、 120°C で1時間加熱処理した。その結果、マスクの孔パターンに従った断面構造を有し、フィルム法線方向に対し 30° 斜め方向に傾斜した、柱状構造をなす高屈折率領域を有する光拡散フィルムが得られた。光拡散フィルムの高分子マトリックスの屈折率は1.47、高屈折率領域の屈折率は1.52であった。こうして得られた指向性光拡散フィルムの散乱特性は、図11に示すものであった。また垂直方向のAOVは 5° 以下であり、直線光透過率は10%以上であり、極めて小さな散乱であった。

【0043】

実施例1のように、導光板の中央部に光源として1灯のLEDが配置されている時には、図3に示したようにA-A線方向の光量が多く、このため図1に示すような従来の面光源装置においては、面光源装置の中央部に横長楕円状の輝度ムラが発生することが知られている。しかし、実施例1の面光源装置では、指向性光拡散フィルムの散乱方向が輝度ムラの方向と同方向となるように配置することにより、従来見られた輝度ムラの解消を図ることができた。そして、この面光源装置をバックライトとして用いて液晶パネルの照明を行なったところ、斜め方向からの観察の場合を含め輝度ムラはなく、かつ正面方向は輝度の高い、明るい画像表示装置が得られた。

【0044】

ちなみに、実施例1での面光源装置においては、 $10^\circ\sim30^\circ$ に散乱が最大となる光拡散フィルムにより効率的に輝度ムラを解消でき、柱状構造の傾斜が $5\sim60^\circ$ の範囲の指向性光拡散フィルムを用いた場合、いずれにおいても、輝度ムラの解消が図れた。

【実施例2】

【0045】

本発明の第2の実施例を図14に示す。実施例1の面光源装置においては、反射板が導光板と別体とされていたが、この実施例2の面光源装置は、導光板12の下面の拡散パターン12dが形成された面に蒸着によりアルミニウム膜19からなる反射面が一体に形成されており、反射板を用いないことを除き、他の構成は実施例1と同じである。導光板の下面に反射面を直接形成することにより、全反射を利用して光を反射させる実施例1の装置よりも確実に光を反射させることができ、光利用効率をより向上させることができる。

【実施例3】

【0046】

実施例1の面光源装置の指向性光拡散フィルム14を、導光板12上に配置することに代えてプリズムシート15上に配置する点を除き実施例1と同様の構成にして、実施例3の面光源装置を得た。この面光源装置をバックライトとして用いて液晶パネルの照明を行なったところ、斜め方向からの観察の場合を含め輝度ムラはなく、かつ正面方向は輝度の高い、明るい画像表示装置が得られた。輝度ムラのない表示装置が得られた。

【実施例4】

【0047】

実施例4の面光源装置は図7に示されたものであり、光拡散フィルム15を導光板12上に光拡散粘着剤16により貼り合せることを除き他は実施例1と同様にして得られた。ここで、前記光拡散粘着剤は次のようにして調製された。すなわち、屈折率1.50のアクリル系の粘着剤100部に対し、イソシアネート系硬化剤(D-90；総研化学社製)を1.5部添加したベース塗料に、フィラーを添加し、アジテータで1時間攪拌して調製された。そしてこの光拡散粘着剤を8μm厚の離型シート(PET3801、リンテック社製)に乾燥後の厚さが25μmになるように塗布し、乾燥して拡散粘着層を形成した後、拡散粘着層上に離型シート(K-14、帝人社製)を貼り合わせ、拡散粘着シートを得た。フィラーとしてシリコン樹脂ビーズ、屈折率1.43、平均粒子径1.0μm、含有量3%としHAZ E値は25であった。この光拡散粘着剤を前記光拡散フィルム14に貼付し、導光板12にローラーで加圧接着することにより面光源装置を得た。この面光源装置をバックライトとして用いて液晶パネルの照明を行なったところ、斜め方向からの観察の場合を含め輝度ムラはなく、かつ正面方向は輝度の高い、明るい画像表示装置が得られた。

【0048】

また、シリコン樹脂ビーズの含有量を2%としHAZ E値15の光拡散粘着剤を得、これを用いて前記と同様にして面光源装置を形成し、液晶パネルの照明を行なったところ、実施例4の面光源装置と同様、斜め方向からの観察の場合を含め輝度ムラはなく、かつ正面方向は輝度の高い、明るい表示装置が得られた。

【実施例5】

【0049】

実施例4において、光拡散粘着剤として次のものを用いることを除き同様にして、実施例5の面光源装置を作製した。すなわち、屈折率1.50のアクリル系の粘着剤100部に対し、イソシアネート系硬化剤(D-90；総研化学社製)を1.5部添加したベース塗料に、フィラーを添加し、さらに粒径が数nmのTiO₂またはZrO₂のブタノールまたはMEK(メチルエチルケトン)分散液を添加し、アジテータで1時間攪拌して、光拡散粘着剤を調製した。この光拡散粘着剤を8μm厚の離型シート2(PET3801、リンテック社製)に乾燥後の厚さが25μmになるように塗布し、乾燥して光拡散粘着剤層を形成した後、光拡散粘着層上に離型シート(K-14；帝人社製)を貼り合わせ、光拡散粘着シートを得た。フィラーとしては、シリコン樹脂ビーズ(屈折率1.43、平均粒子径1.0μm)を用い、含有量3%となるように添加した。HAZ E値は25であった。なお、TiO₂またはZrO₂の各微細粒子のブタノールまたはMEK分散剤を適宜の分量混ぜ合わせることにより、光拡散粘着剤の屈折率を所望の屈折率になるように調製することができる。例えば光拡散粘着剤の屈折率を1.6にしたい場合、固体分量で、TiO₂またはZrO₂を35重量部とし、ベース樹脂(フィラーを含む)を65重量部となるように調整すればよい。この光拡散粘着剤を前記光拡散フィルムに貼付し、導光板12にローラーで加圧接着することにより面光源装置を得た。この面光源装置をバックライトとして用いて液晶パネルの照明を行なったところ、斜め方向からの観察の場合を含め輝度ムラはなく、かつ正面方向は輝度の高い、明るい画像表示装置が得られた。

【0050】

また、シリコン樹脂ビーズの含有量を2%としHAZ E値15の光拡散粘着剤を得、これを用いて前記と同様にして面光源装置を形成し、液晶パネルの照明を行なったところ、実施例5の面光源装置と同様、輝度ムラのない、明るい表示装置が得られた。

【実施例6】

【0051】

この実施例においては、面光源装置は図15の構成を有する。すなわち、面光源装置は、図示されていない発光部、導光板12、反射板13、指向性光拡散フィルム14、光拡散粘着剤層16からなり、発光部は、発光ダイオード(LED)等のいわゆる点光源が導光板入射端面中央部に対向するよう設けられている。また、導光板12の下面12bには、LEDを中心とした同心円状の多数のプリズムパターンPが形成されている。実施例5

と同様の光拡散粘着剤を用いて、実施例5と同様にして光拡散フィルム14を導光板12に貼付け、実施例6の面光源装置を作製した。この面光源装置をバックライトとして用いて液晶パネルの照明を行なったところ、斜め方向からの観察の場合を含め輝度ムラはなく、かつ正面方向は輝度の高い、明るい表示装置が得られた。なお、指向性拡散フィルム14の上部には、プリズムシート15が更に設けられてもよい。

【実施例7】

【0052】

実施例7の面光源装置を図15および図16により説明する。図16は実施例7の面光源装置の平面模式図であり、中央円内にはプリズムシートがないときを想定した場合における指向性光拡散フィルムの一部拡大平面図が示されている。図17は図16のB-B断面図である。実施例7の面光源装置は、発光部を構成するLEDからなる点光源11、導光板12、反射板13、光拡散フィルム14、プリズムシート15からなっている。本実施例の場合、点光源は1灯で、図16に示されるように導光板の角12cの光入射端面に埋め込まれるように配置されている。導光板12は、ポリカーボネート樹脂あるいはメタクリル樹脂によって成形されており、導光板12の背面（下面）には多数の拡散パターン12dが形成されている。拡散パターン12dは、図5に示されるように発光部を中心として同心円状に配置されている。拡散パターンは、断面三角形状または断面略半円状をした凹部によって形成されている。なお、導光板の背面側に配置された反射板上部に同心円のプリズムパターンを形成したプリズムシートを配置しても、さらに反射板の反射面を同心円のプリズムパターンとしても同等の特性を示す。反射板に代えて、前記凹凸パターンが形成された導光板背面12dに金属薄膜を形成することによって光反射面としてもよい。このときには、金属薄膜からなる光反射面で光を反射させて導光板側へ戻すことができるので、全反射を利用して光を反射させるよりも確実に光を反射させることができる。よって、光学シートの裏面からの光の漏れが無く、光利用効率をより向上させることができる。

【0053】

一方、この実施例においては、指向性光拡散フィルム14は、該導光板の上部に、図16に示されるように、指向性光拡散フィルムの柱状構造22の軸芯の傾斜がB-B線に沿った方向となるよう、即ち指向性光拡散フィルムの散乱方向が輝度ムラの方向と同方向となり、指向性光散乱フィルムの散乱方向が発光部と対向する対角に向かうように配置される。なお、指向性光拡散フィルムは、プリズムシートの上部に配置されても良い。実施例7の面光源装置をバックライトとして用いて液晶パネルの照明を行なったところ、斜め方向からの観察の場合を含め輝度ムラはなく、かつ正面方向は輝度の高い、明るい表示装置が得られた。

【図面の簡単な説明】

【0054】

【図1】従来の面光源装置の一例の模式断面図である。

【図2】従来の面光源装置の他の例の模式断面図である。

【図3】点光源の照射強度を示す図である。

【図4】点光源を導光板の入射端面中央部に配置した面光源装置の従来例の模式断面図および平面図である。

【図5】点光源を導光板の入射端面角部に配置した面光源装置の従来例の構成を示す。

【図6】本発明の面光源装置の一例の模式断面図である。

【図7】本発明の面光源装置の他の例の模式断面図である。

【図8】本発明の面光源装置の更に他の例の一部模式断面図である。

【図9】本発明の面光源装置の更に他の例の一部模式断面図である。

【図10】本発明で用いられる指向性光拡散フィルムの一部模式断面図である。

【図11】指向性光拡散フィルムの散乱を生じる光軸に沿った方向における光透過特性を示す図である。

【図12】指向性光拡散フィルムと光拡散粘着剤層を合わせた光拡散フィルムの、指向性光拡散フィルムの散乱を生じる光軸に沿った方向における光透過特性を示す図である。

【図13】導光板の中央部に光源が配置された実施例1の面光源装置の模式平面図である。

【図14】実施例2の面光源装置の模式断面図である。

【図15】実施例6の面光源装置の一部模式断面図である。

【図16】実施例7の面光源装置の模式平面図である。

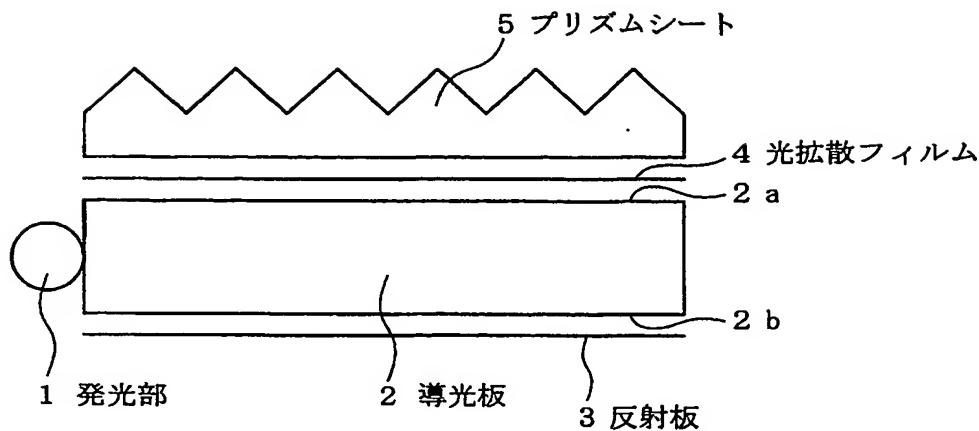
【図17】図16のB-B断面図である。

【符号の説明】

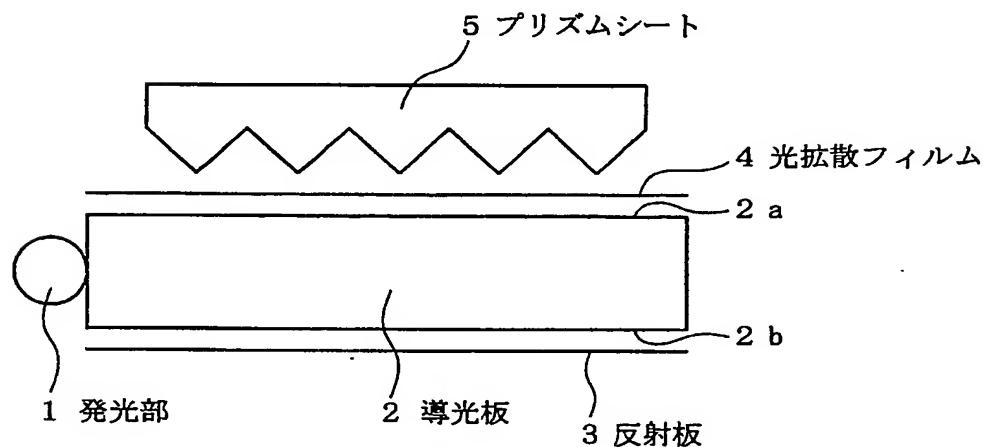
【0055】

- 1 発光部
- 2、12 導光板
 - 2 a、12 a 導光板の光射出面（上面）
 - 2 b、12 b 導光板の背面（下面）
- 3、13 反射板
- 4 光拡散フィルム
- 5、15 プリズムシート
- 7 液晶パネル
- 11 点光源
- 12 c 導光板のコーナー部
- 12 d 導光板の拡散パターン
- 12 e 導光板の入射端面
- 12 m 導光板のマイクロプリズム
- 14 指向性光拡散フィルム
- 16 光拡散粘着剤層
- 18 反射層
- 19 アルミニウム層
- 21 指向性光拡散フィルムの低屈折領域
- 22 指向性光拡散フィルムの柱状構造領域
- P プリズムパターン

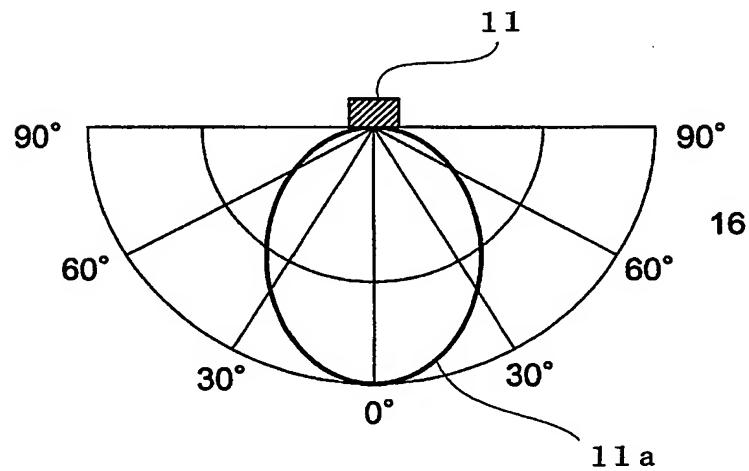
【書類名】 図面
【図1】



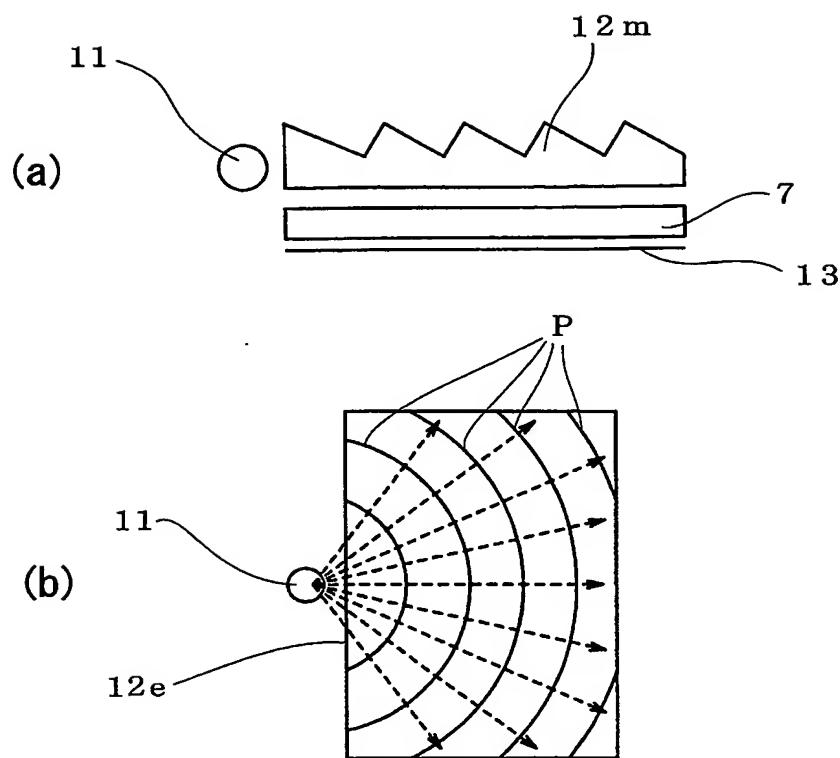
【図2】



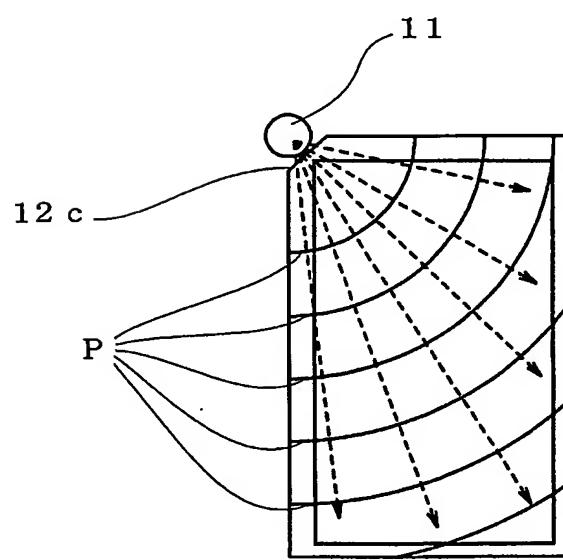
【図3】



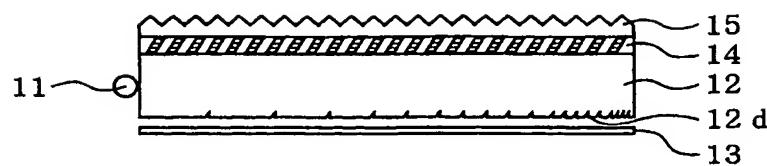
【図4】



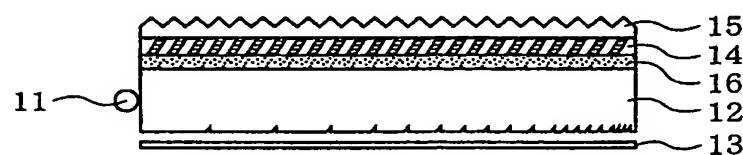
【図5】



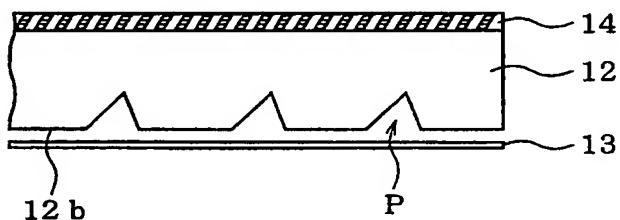
【図 6】



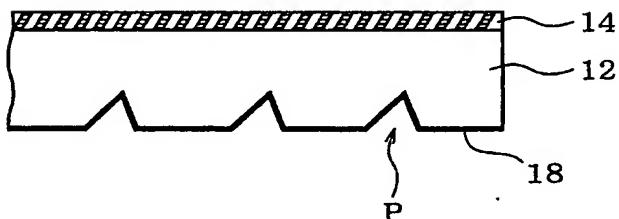
【図 7】



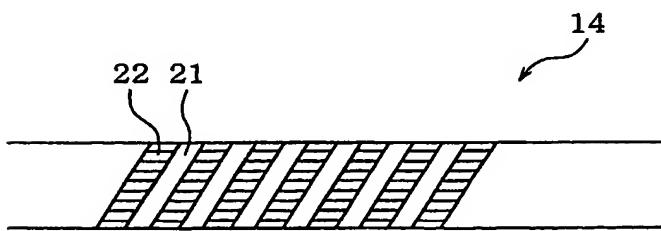
【図 8】



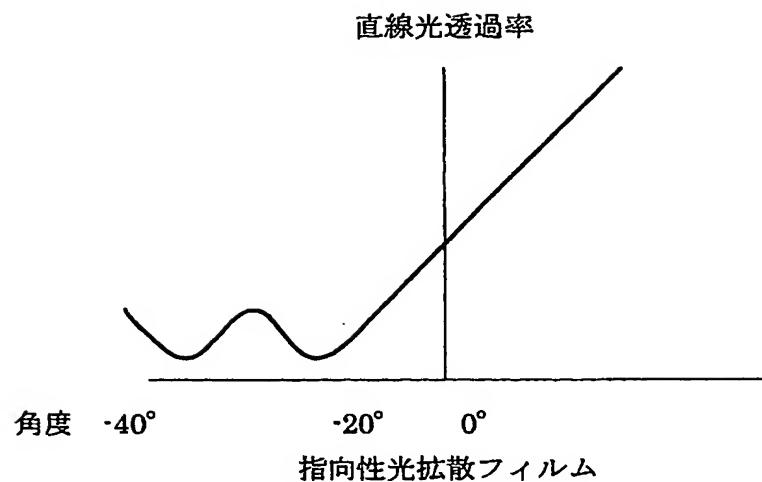
【図 9】



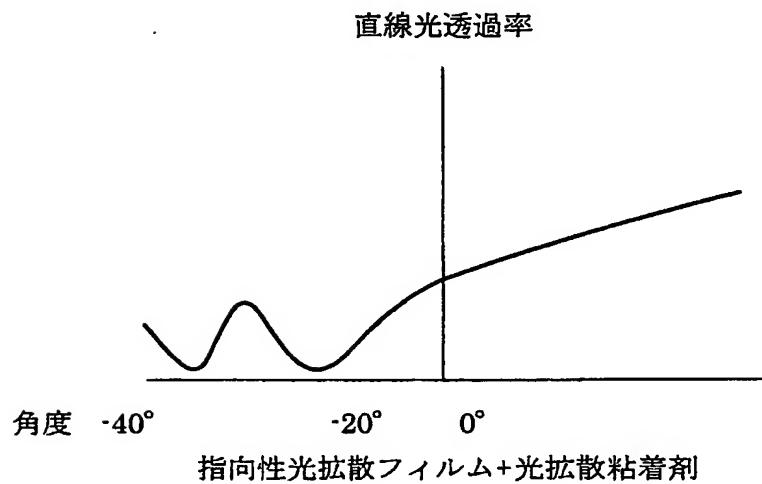
【図 10】



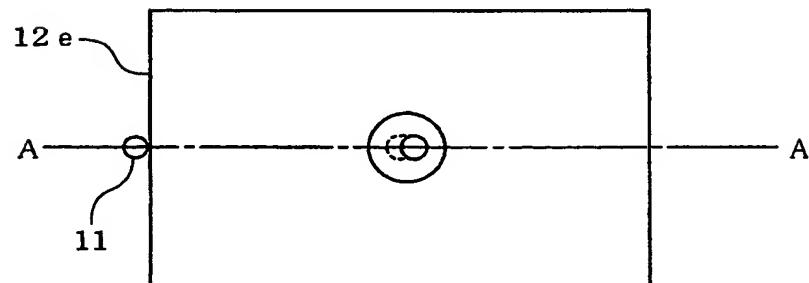
【図11】



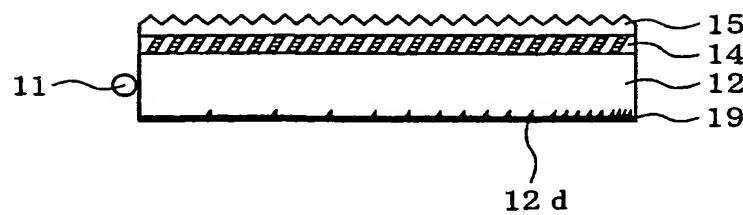
【図12】



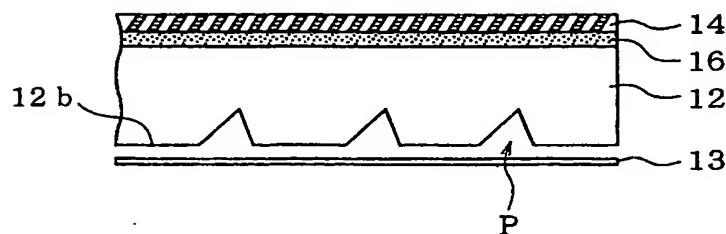
【図13】



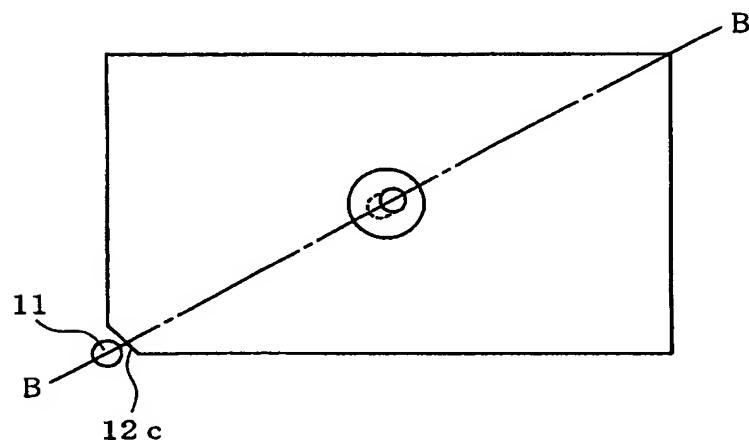
【図14】



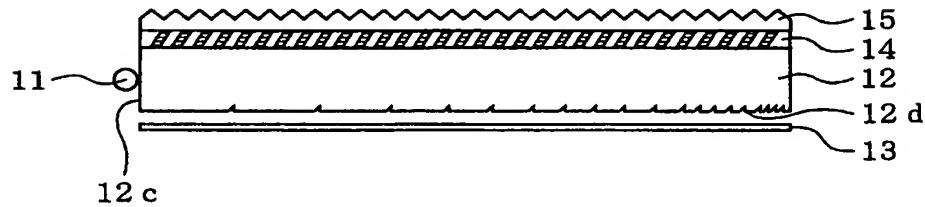
【図15】



【図16】



【図17】



【書類名】要約書

【要約】

【課題】 1灯の点光源が光源として用いられる面光源装置において、輝度ムラ、特に斜め方向からの観察を行った場合における輝度ムラの視認が少なく、かつ画面正面方向においてより明るく、高効率の光照射が可能な面光源装置を提供する。

【解決手段】 点光源からなる発光部11および導光板12を有し、導光板の背面側に反射面13が設けられ、またプリズムパターン15を有する面光源装置において、導光板12の出射面12a側に、光を散乱透過させる屈折率の異なる少なくとも二相からなり、屈折率の大きい一相がフィルムの厚さ方向に延在する柱状構造を有する多数の領域を含むと共に、該柱状構造がフィルムの法線方向に対して5°以上60°以下の角度で傾斜した指向性光拡散フィルム14を、該指向性光拡散フィルムの散乱方向が輝度ムラの方向と同方向となるように配置した面光源装置。

【選択図】 図6

認定・付加情報

特許出願の番号	特願2003-281211
受付番号	50301247011
書類名	特許願
担当官	第四担当上席 0093
作成日	平成15年 7月29日

<認定情報・付加情報>

【提出日】	平成15年 7月28日
-------	-------------

【書類名】 出願人名義変更届
【整理番号】 K03056
【あて先】 特許庁長官殿
【事件の表示】
 【出願番号】 特願2003-281211
【承継人】
 【識別番号】 597164194
 【氏名又は名称】 クラリアント インターナショナル リミテッド
【承継人代理人】
 【識別番号】 100108350
 【弁理士】
 【氏名又は名称】 鐘尾 宏紀
【承継人代理人】
 【識別番号】 100091948
 【弁理士】
 【氏名又は名称】 野口 武男
【手数料の表示】
 【予納台帳番号】 045447
 【納付金額】 4,200円
【提出物件の目録】
 【物件名】 承継人であることを証する書面 1
 【援用の表示】 特願2001-050307の出願人名義変更届に添付のものを援用する。
【包括委任状番号】 9804572

認定・付加情報

特許出願の番号	特願2003-281211
受付番号	50401090225
書類名	出願人名義変更届
担当官	小池 光憲 6999
作成日	平成16年 8月 2日

<認定情報・付加情報>

【提出日】	平成16年 6月29日
【承継人】	
【識別番号】	597164194
【住所又は居所】	スイス国、ツェーハーー4132、ムッテンツ 1、ロートハウスシュトラーセ 61
【氏名又は名称】	クラリアント インターナショナル リミテッド
【承継人代理人】	申請人
【識別番号】	100108350
【住所又は居所】	東京都千代田区神田淡路町2-10-14 ばん だいビル2階 むつみ国際特許事務所千代田オフ イス
【氏名又は名称】	鐘尾 宏紀
【承継人代理人】	
【識別番号】	100091948
【住所又は居所】	東京都千代田区神田淡路町2丁目10番14号 ばんだいビル むつみ国際特許事務所
【氏名又は名称】	野口 武男

特願 2003-281211

出願人履歴情報

識別番号 [397040605]

1. 変更年月日 1998年 5月 7日

[変更理由]

住所変更

東京都文京区本駒込二丁目28番8号 文京グリーンコート
センター オフィス9階

氏名 クラリアント ジャパン 株式会社

特願 2003-281211

出願人履歴情報

識別番号 [597164194]

1. 変更年月日 1997年10月17日

[変更理由]

住 所

新規登録

スイス国、ツェーハーー4132、ムッテンツ 1、ロート
ハウスシュトーレセ 61
クラリアント インターナショナル リミテッド

氏 名